

「身をもって模範を示すためでした」

2018年12月05日

テサロニケの信徒への手紙 二 3章6節～10節 兄弟たち、わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの名によって命じます。怠惰な生活をして、わたしたちから受けた教えに従わないでいるすべての兄弟を避けなさい。あなたがた自身、わたしたちにどのように倣えばよいか、よく知っています。わたしたちは、そちらにいたとき、怠惰な生活をしませんでした。また、だれからもパンをただでもらって食べたりはしませんでした。むしろ、だれにも負担をかけまいと、夜昼大変苦勞して、働き続けたのです。援助を受ける権利がわたしたちになかったからではなく、あなたがたがわたしたちに倣うように、身をもって模範を示すためでした。実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、「働きたくない者は、食べてはならない」と命じていました。

「著者」は、「兄弟たち、わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの名によって命じます」と強い口調で語りかけている。「怠惰な生活をして、わたしたちから受けた教えに従わないでいるすべての兄弟を避けなさい」。あなたがた自身は、私たちにどのように倣えばよいか、よく知っているはずである。私たちがテサロニケにいた時、怠惰な生活はしなかった。誰からもパンをただでもらって食べたりはせず、むしろ、誰にも負担をかけまいと、夜昼大変苦勞して、働き続けた。私たちに援助、謝儀を受ける権利がなかったからではなく、あなたがたが私たちに倣うように身をもって模範を示すためであった。

パウロは、宣教している最前線からは謝儀を受け取らなかった。ユダヤ教のラビは、「神の言葉を売り物にしない」と、手に職をつけ、自活していた。この矜持をパウロは守り抜いた訳であるが、それだけではない。パウロは福音を少しでも妨げてはならないと、謝儀を受け取る権利を放棄したのである。しかし、Ⅱテサロニケの「著者」の場合は、意味が違うようである。仕事に熱心に励むように模範を示すために、昼夜苦勞をして働いたのである。そして、テサロニケにいた時、私たちは「働きたくない者は、食べてはならない」と命じたと言っている。

「働きたくない者は、食べてはならない。」この言葉は、主の日が直ぐに到来するのだから、あくせく働いてもしょうがない。やがて、裁かれるのだからという思いで、終末信仰をとらえていた人々への警告である。しかし、終末が来るので人生を放棄してもよいはずがない。「著者」は、真面目に働いて、品位を持って歩み、キリスト信徒以外の人々にも迷惑をかけないためであると諭している。

終末信仰は、主イエスが雲に乗って来られるという現象ではなく、全き救いのなる日を待ち望んで、今を、キリストの福音に信従する生活を全うするということではないか。だから、人生を放棄しているかのように働かないということはありません。というのである。

ロシアの革命家レーニンが、社会主義を實踐する上で守らなければならない戒律として、「働かざる者、食うべからず」という言葉を使った。働かざる者とは、資産家、資本家、地主などで、彼らは働かなくても食べていけた。レーニンは、彼らには食べ物を与えない、欲しければ、働きなさいと言った訳である。

今日、主の日が近いので働く必要はないと言い、特殊な団体を形成するケースも見かけることがあるが、常識的には、そういう人はいない。働かずに膨大な利益を上げている人はいるが、その人々は内部から、虚無に飲み込まれていくのではないか。